



「ちゃーんと肩まで浸かってね♡」
もにゅもにゅと弟の花太を胸の谷間に押し込んでいく姉の翠華。
「うふっ、ふはっ…！」
肩どころか顔まで乳肉に浸かって息をするのもひと苦労の花太。
「どう？ きもちいい？」
「す、翠華(すいか)姉ちゃん、何でそんなにでっかくなったのッ？！」
「え〜？ 私は元から360cmだよ〜？」
「ち、ちがうよッ！ 僕よりちょっとおっきいくらいだったじゃんっ！」
「うん、そうだよ、花太と2mくらいしか変わらないよ〜」
優しくたふたふとおっぱいを揺らす翠華。しかし、乳肉に溺れそうな花太は
おっぱいを楽しむどころではない。
「うふ、いや、2mも違うじゃん！」
「うふっ、2m“しか”だよ？ ほら、上を見て？」
「ん？ 上…？」
翠華の胸の谷間から見上げると……



「デカーッ!!!」

花太が見上げた先には巨大になった姉の黒華(くろか)の顔があった。

「く、黒華姉ちゃんッ! 何でそんなにっかいのっ!？」

「んん? あたしの身長は元から25mだぞ？」

360cmもある翠華と花太の下半身を谷間に収めてなお余りある大爆乳が黒華の呼吸に合わせてゆっくりと揺れる。

「いや! そんなわけないじゃん!! 25mってもうプールじゃんッ!」

「ははっ、確かに花太からすればあたしのおっぱいはプールかもな」

「わかった、これは僕の夢だっ。いつも姉ちゃんたちにイジメられてるからっ」

「くくっ、花太も大変だなあ。夢の中でまであたしたちと遊びたいなんて」

「違うよッ! うううこんな悪夢早く覚めてくれ…っ」

小さな弟をおっぱいでいじめながら翠華がつぶやいた。

「あ、それじゃいつもみたく私たちから逃げられたら夢から醒めるんじゃない？」

「なるほど、でもあたしと翠華からは逃げられても桃華(ももか)姉からは逃げられるかな？」

「げ、ひょっとして…っ!」

花太は恐るおそる黒華の顔よりもさらに上に目をやると……



「も、桃華姉ちゃん…」

「あ、花太～、そんなとこいたの？ 小さいから気づかなかったよ～」

25mの巨人黒華がいたのは超巨大な桃華の胸の上であつた。

「い、一体何mあるんだ…っ？」

「ん～？ わたしの身長？ 別にいつもと変わらないよ？ 175mだよ」

「た、単位が違う…」

「？ わたしの身長がどうかした？」

黒華がくくっと笑いをかみ殺した。

「花太があたしたちのおっぱいから脱出したいんだってさ。桃華姉って

乳の大きさ今どれくらい？」

「あ、それでわたしの大きさ気にしてたんだ～」

桃華はイタズラっぽく笑った。

「んっふっふ～、直径で大体50mくらいかな～？ 果たして花太選手は

このすべすべおっぱいを無事に下山できるでしょーかっ！」

しかし、花太の絶望は高さ50mの超乳ではなかった。

「でもだいじょうぶ、もしわたしのおっぱいから滑り落ちてても…

蒼華(あおか)姉さんのおっぱいの上だから」



「うう、想像したくなかった……」

花太の悪い予感は的中していた。

175mの桃華は姉の蒼華の超巨大な乳山に埋もれかけていた。

もはや花太とコミュニケーションがとれないサイズ差。

代わりに桃華が蒼華に呼びかけた。

「おお姉、花太がこのおっぱい風呂から出たいんだって」

「おお、そうなのか？ アタシじゃかろうじて視認できるくらいだからなー」

「あはは、そうだよね。おお姉って身長何mだったけ？」

「アタシ1kmあるからなあ… ま、じゃあアタシは下手に動いて花太を押し潰したりしないようじっとしておくよ」

「よかったね花太、おお姉も協力してくれるって」

「いや、本物の山と同じくらいのおっぱいを下りなきゃいけないじゃん」

「でもさー」

蒼華がつぶやく。

「ラスボスは紫華(しか)姉さんでしょ？」

どこからともなく声が聞こえる。

「んー、私呼んだ？」





「うわっ、紫華姉さんっ！ 聞こえたの？」
「もちろんよっ！ 私の地獄耳は妹たちの声も花太くんの声も全部聞き逃さないわ！」
「えっ！ 僕の声も聞こえてるのっ！」
「ええ、私たちのおっぱいパラダイスから脱出したいのよね？」
「うん！ 早くこの悪夢から解放して！」
紫華は愛おしそうに自分の乳首の先の妹たちを見つめた。
「可愛い花太くんのお願ひだし叶えてあげたいのは山々だけど…」
はああ、と吐息を漏らして紫華は続けた。
「私はこの夢の世界がいつまでも続いてほしいから協力できないわ」
「え…」
「花太くん、自力で頑張って脱出してね。 私、乳首だけで2kmくらいあるけど」
「む、無理だーっツッ！！」